

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02094

研究課題名（和文）宋西思想の総合的研究 思想体系と後代の評価をめぐって

研究課題名（英文）A comprehensive study of Yousai's thoughts : The difference between his actual thoughts and later generations' evaluations.

研究代表者

米田 真理子（YONEDA, MARIKO）

神戸学院大学・法学部・准教授

研究者番号：00423210

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、宋西の思想を新しい視角から考察することである。近年発見された宋西の著作と弟子たちの著作の読解を通して、宋西の思想の特徴を解明し、さらに、彼らの宗教活動の実態を考察した。結果、宋西をはじめとする当時の天台僧は、自らが慣れ親しんだ密教思想をふまえて、宋代に流行した禅宗思想を理解しようとしていたことがわかった。さらに、宋西の実際の活動と宋西に対する後代の評価との間には乖離があり、その理由は、日本で禅宗思想が定着したのちに、宋西の思想を解釈したからだと結論づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宋西といえば、鎌倉初頭に、中国で禅を学んで帰国し、日本に禅宗を広めた人物として知られてきた。本研究では、この評価には、宋西の活動実態と乖離する点が認められることを指摘した。その要因は、宋代に流行した禅宗が日本に定着した鎌倉時代後期に、宋西の思想を解釈したことによると結論づけた。宋西の禅始祖像は、鎌倉時代初期より禅が流行したという理解につながり、当時の文化を把握するさいにも少なからず影響した。本研究はそうした認識に再考を促す意義を有する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to consider Yousai's thoughts from a new perspective. Through the understanding of the recently discovered works of Yousai and the works of Yousai's disciples, the characteristics of Yousai's thought were clarified. Furthermore, I considered the actual state of religious activities of Yousai and his students. As a result, the following was found. The Tendai Buddhist monks at that time, including Yousai, were trying to understand the Zen Buddhist thoughts that were popular during the Song Dynasty, through the esoteric thoughts that they were familiar with. Furthermore, there was a discrepancy between Yousai's actual activities and Yousai's subsequent generations' evaluations. The reason for this is that Yousai's thought was interpreted after the idea of Zen Buddhism was established in Japan.

研究分野：日本文学

キーワード：宋西 密教 宋朝禅 改偏教主決 茶祖伝承 菩提樹の将来

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 栄西の事跡とその評価

栄西(1141年~1215年)は、従来、禅僧としての評価が定着しており、思想だけでなく、その事跡も、禅と関連づけて考察されることが多かった。特に、二度目の入宋中に、虚庵懐敞から禅を学んだことが重視されたため、天台僧から禅僧に転向したかのように受け止められることもあった。その一方で、栄西の著述のほとんどが密教の書であり、最晩年の『喫茶養生記』も、密教の教義に基づく内容であることは、よく知られた事実であった。

もちろん、栄西が禅を学んだことも、密教を生涯続けたことも、事跡としてはともに事実である。問題は、栄西の研究史において、それらを総体として把握できていなかったことにあると考えられた。また、栄西に対する禅に偏る認識があったことも事実である。かかる認識は、1322年の『元亨釈書』を嚆矢とする、後代に生じた評価とみなされてきたが、その是非も問い直す必要があった。

(2) 研究開始当初の状況

本研究を開始した当初は、名古屋市真福寺大須文庫で発見された栄西の著作が、2006年11月刊行の真福寺善本叢刊第2期3『中世先徳著作集』と、2013年3月刊行の中世禅籍叢刊の第1巻『栄西集』に収録されたことで、栄西の著作を対象とする研究環境が整いつつあった。また、新発見の著作を含む栄西の著作群が、2010年開催の『栄西と中世博多展』(於福岡市博物館)や、2014年開催の『栄西と建仁寺展』(於東京国立博物館)他で展示され、その実態が広く知られるようになっていた。そして、中世禅籍叢刊は、第1巻の『栄西集』刊行後も、達磨宗や、円爾や無住ら栄西門流の巻が続き、文献学的研究の基盤が固まり、日本中世における禅宗の見直しの気運が高まっていた。

しかし、栄西の密教の著述を、彼の思想の全体構造の中に位置づける研究はいまだなく、栄西を禅僧と見なす固定的な観念も根強く残っていた。そのため、密教と禅との関係を含めた栄西の思想の全体像を体系的に解明することと、鎌倉期の禅の受容の実態を明確にすることは、重要な課題と考えられたのである。

2. 研究の目的

(1) 栄西による禅理解の解明

栄西の思想は天台教学を基盤とするもので、中国で学んだ禅をそこにどう位置付けるかが課題となる。栄西が中国で禅を受けたのは、二度目の入宋中である。そのため、従来は、二度目の帰国後に執筆された『興禅護国論』と『喫茶養生記』が、主に考察の対象とされてきた。しかし、栄西が禅に関心を持った最初は、初度の入宋前の博多でのことであった。栄西は、最澄が中国で禅を受けて帰朝し、比叡山に伝えていたことを知り、その復興を自らに課したのである。鎌倉時代に、栄西やその門弟たちが、宋朝で行われている禅宗を、どのようにして理解していったのかを、彼らの著述の分析を通して明らかにする。

(2) 栄西像の形成と中世禅宗史の見直し

栄西を禅の始祖とみなす評価が生じたことで、栄西が活躍した鎌倉時代初期より、日本で禅が盛んになったかのような印象が抱かれてきた。さらに、それに付随して、その時期の諸文化にも禅が影響したとする受け止め方もなされた。そこで、栄西の活動の実態を検証し、後代に形成された栄西像との間に、どのような異なりがあるのかを明らかにする。さらに、栄西からその門流

に至る禅の受容の系譜を考察し、栄西に対する後代評価の本質を見極めることにより、中世禅宗史の見直しにつなげる。

3. 研究の方法

(1) 栄西による禅の受容

栄西の著作の分析を行う。真福寺大須文庫で発見された『改偏教主決』は、最初の入宋から二度目の入宋までの20年間のうち、約15年間を過ごした九州で、在地の僧との間に起こった論争を書き留めた書である。そこには、これまで知られていなかった栄西の事跡が含まれると同時に、当地で執筆した他の著作とも有機的な結びつきを見せる。本書は、中世禅籍叢刊『栄西集』にすでに収録されているが、本文が難解であるため、まず、訓読文を作成し、注釈を付して、読解に努める。本書を軸に、栄西の活動の具体的様子を考察し、さらに、栄西門流の僧による著述もあわせて、最澄の禅を前提に、中国で学んだ新しい禅を、どう理解していったのかを検証する。

(2) 栄西像の形成と中世禅宗史の見直し

栄西の著述の分析を通して得られた、栄西の動向に関する情報をもとに、実地踏査を行い、栄西門流の形成過程を跡付け、当該期の天台僧による禅受容の実態を解明する。そして、その実態と後代の栄西像との間に、どのような乖離があるかを検証し、そうした評価が生じた要因を探る。さらに、栄西を禅の始祖とみなす評価から派生した、当該期の諸文化への影響について、茶祖伝承と栄西による菩提樹の将来を中心に考察する。これらの研究成果をふまえ、中世禅宗史の見直しにつなげる。

4. 研究成果

(1) 栄西を禅始祖とする評価の内実

従来、栄西(1141~1215)が、中国から日本へ禅宗を伝えたことで、鎌倉時代に禅宗が広がったとされ、その栄西による禅宗は、鎌倉新仏教の一つとみなされてきた。その一方で、栄西は天台僧であり、生涯を通じて密教を修め、密教に関する著作を多く執筆したこともよく知られていた。栄西の実際の事跡と禅にかかわる評価との間には乖離があり、禅の側面を強調する評価は、元亨2年(1322)の『元亨釈書』において、禅の始祖とみなされたことに始まると考えられてきた。

本研究では、栄西に対する評価の内実を検証するため、鎌倉時代後期に活躍した無住(1227~1312)に焦点を当てて考察した。無住は、栄西の孫弟子にあたる円爾(1202~1280)に教えを受けた僧であり、その著述に栄西も登場する。

まず、栄西と無住による、日本での禅の受容に対する認識を比較して、両者の相違点を明確にした。つぎに、無住の著作『沙石集』・『雑談集』・『聖財集』に基づき、無住が禅宗をどう捉えていたかを分析した。その結果、栄西は、最澄に始まる日本天台宗における禅の受容をふまえて、栄西自身が中国で受けた禅を理解しようとしていたことがわかった。それに対して、無住は、まず、栄西の禅にかかわる事跡を偏重する傾向が認められ、さらに、日本での禅宗の歴史を、日本人の入宋僧に中国人の来日僧を繋ぐ系譜によって示し、その最初に栄西を位置付けていた。この無住の認識は、栄西を禅の始祖とする認識の嚆矢とみなすことができ、それは、『元亨釈書』へと受け継がれ、後世の歴史観にも影響したと結論した。

(2) 栄西一門の形成と禅宗史の再考

これまでの栄西研究では、栄西の禅の事跡が重視されてきた。栄西は、二度目の入宋中に禅を受けたことで、禅僧になったかのごとく捉えられ、かかる認識は、鎌倉期を対象とする研究にも影響した。代表的なものが、栄西の伝えた禅宗を鎌倉新仏教とみなす見解である。

しかし、栄西が禅に関心を持った最初は、一度目の入宋の前である。栄西は、『興禅護国論』に、その時、最澄が唐で禅を受け、叡山に伝えたことを知ったとして、帰国後に、叡山の先師たちの書籍によって禅について学んだと記している。また、『入唐縁起』には、二度目の入宋までの二十年間は、密教に専心したとも記していた。ここに、栄西の密教と禅のかかわりを考える手がかりがあるといえる。

その二十年間のほとんどを、栄西は九州で活動したが、従来の研究でそのことが注目されることはなかった。そこで、九州での著作を分析し、栄西の活動の軌跡を跡づけるとともに、それらの著作が門弟に向けて書かれたことから、当地で栄西の一門が形成されたとみなして、その実態を検証した。栄西と弟子たちによる禅の受容は、最澄が叡山に敷いた禅が途絶えたため、それを復興させて、再び叡山に三法（禅・天台・真言）を具備させることを目指したものであった。また、彼らが、自ら慣れ親しんだ密教の思想をふまえて、宋代に流行した禅宗思想を理解しようとしていたことも明らかになった。

そして、こうした栄西とその門流による禅受容の実態は、鎌倉時代後期に編纂された『溪嵐拾葉集』に、系譜として掲載されていた。一方、(1)で見たように、無住や『元亨釈書』は、日本人僧に中国人僧を結びつけた禅宗の系譜を考えていた。つまり、同時代に異なる二つの系譜が存在していたのである。無住や『元亨釈書』が示した系譜は、鎌倉時代以降に、新たに中国の禅法を日本に伝えた僧の系譜であるといえ、栄西は、その始発に位置付けられたのである。それは、日本に宋朝の禅が定着した後に、遡及的に、栄西の思想を評価したものであった。そして、この系譜が、その後の禅宗史に影響したと結論づけた。

(3) 茶の説話と菩提樹の将来

栄西を禅の始祖とみなす認識は、鎌倉期の文化に対する考察にも影響してきた。本研究では、栄西の思想を新しい視角から捉えたが、その成果をふまえて、以下の二つの考察を行った。

第一に、栄西を茶祖とみなす伝承を分析した。日本の茶の始まりは、一般には、鎌倉時代初頭に、栄西が中国から持ち帰った茶を明恵に分け与え、明恵が京都の梅尾に植えたことによると考えられてきた。しかし、栄西以前の平安時代にすでに茶の栽培は始まっており、それを根拠に、この伝承が史実でないことも、繰り返し指摘されてきたのである。それでもなお、栄西を茶祖とする説が根強くあるのは、そこに栄西の禅始祖像が少なからず影響していたことが考えられた。そこで、茶の伝承を載せる『明恵上人伝記』の記事を分析して、最初は明恵が茶祖とみなされていたことを指摘し、その背景には、栄西が『喫茶養生記』で提案した新しい茶の飲み方の普及があったことを明らかにした。

第二に、栄西による菩提樹の将来について考察した。栄西は、中国天台山の菩提樹を日本に送るさいに、最澄が叡山に伝えた仏法の全てを自らが復興させるという願を託していた。具体的には、栄西の時代に廃れていた禅を、栄西が復興させることを意味した。このように栄西の禅受容は、最澄による禅の将来を前提とするものであり、栄西がその復興を大きな目標としていたことがうかがえた。

以上、栄西に対する従来の評価から離れ、新しい視角から考察することで、鎌倉期の文化にも新しい解釈が可能となることを示し得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 米田真理子	4. 巻 12
2. 論文標題 『結縁一遍集』解題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中世禅籍叢刊 稀覯禅籍集 続	6. 最初と最後の頁 739-743
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田真理子	4. 巻 52
2. 論文標題 無住における密教と禅 栄西「禅宗始祖」説を考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田 真理子	4. 巻 1
2. 論文標題 『喫茶養生記』再読 栄西による主張の独創性とその継承	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 比較思想から見た日本仏教	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 米田 真理子	4. 巻 89
2. 論文標題 栄西と密教 新発見著作を中心として	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 72-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 米田 真理子	4. 巻 68
2. 論文標題 茶祖としての明恵 『明恵上人伝記』とその前後	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 46-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田 真理子	4. 巻 -
2. 論文標題 九州における栄西門流の形成と展開 禅宗形成史再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中世禅への新視角 『中世禅籍叢刊』が開く世界	6. 最初と最後の頁 207-268
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 米田 真理子	4. 巻 -
2. 論文標題 菩提樹の伝来 栄西による将来とその意義	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 説話文学会55周年記念論集	6. 最初と最後の頁 225-246
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 米田真理子
2. 発表標題 九州における栄西門流の形成・展開について 禅宗形成史再考
3. 学会等名 名古屋大学CHT公開シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田真理子
2. 発表標題 菩提樹の伝来 宋西による将来とその意義
3. 学会等名 説話文学会55周年記念北京特別大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 米田真理子
2. 発表標題 宋西における宗教的心身観
3. 学会等名 European Association for Japanese Studies（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 米田真理子
2. 発表標題 無住における密教と禅
3. 学会等名 説話文学会例会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 米田 真理子
2. 発表標題 宋西と密教 新発見著作を中心として
3. 学会等名 宗教学会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 米田 真理子
2. 発表標題 宋西一門の形成とその門弟 嚴琳を中心に
3. 学会等名 禅学研究会学术大会（国際学会）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考